

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 115 号

平成23年11月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

<http://encounter.agape.gr.jp/>

「ミス・ローラ・J・モーク その信仰と生涯」より（6）

モーク先生の思い出

佐生健光

モーク先生について、私がいつも思い出しますことは、第1にあのすばらしい笑顔であります。先生には、数度お会いし、お話をお聞きいたしましたが、私の脳裏に浮かんでまいりますのはまずあのお顔であります。あの笑顔は、ほんとうに天国のよろこびにおられるお顔であり、めったにおめにかかれる笑顔ではないと思います。

いま一つ忘れがたきこと。それは、先生が日本での仕事を終え、アメリカにお帰りになる時の事です。先生は、日本に残して行かれる聖句として、「まず神の国と神の義とを求めよ、さらば凡てこれらの物は汝らに加えられるべし。」というマタイ伝の中のイエスのお言葉をおひきになりました。このお言葉が、それ以後、私の胸に焼きつけられました。われわれはしばしば何かの目的のために神の国を求めようと致します。そうではなくて、われわれが、まず神の国と神の義とを求めて、十字架のあがないによってそれが与えられたときはじめて心の平安も、世界の平和も、それについておのずと与えられることを教えられました。...以上、モーク先生のあの笑顔と、このお言葉は、折に触れ、私の心に浮んで消えない思い出であります。

（大林組社員）

モーク先生について思うこと

沢 正雄

たとえどのようなことを、どのように書いて見ても、これがモーク先生の姿であるとして描き出すことはとうてい出来るものではない。そこで最も印象に残っていることを、ただ断片的に思いつくままに、書き記すことにさせていただきたい。

1、モーク先生の一生は、「神の栄光のために」ということであった。

自ら表すことを極度に嫌われた。...

2、「天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない」というみ言葉を先生は文字どおり信じておられた。徹底的にみ言葉の人であった。世の中の人が、いやキリスト者でさえ、神の言葉について読むことはあっても、神の言葉そのものを読むことが少ないことをいつも歎いておられた。われわれのように、み言葉を割り引くことを先生はなさらなかった。先生の生活はみ言葉の上に立っていた。

3、「主来り給う」との再臨の希望は、先生の信仰を、常に生き生きとさせていた。再臨のお話をなさる先生のお顔は、特別に輝いていた。先生が映画館にお出でにならないのは、ああいうところで主におめにかかりたくないからだ、おっしゃった。ご帰米後、日本を再度お訪ねくださるようお願いしても、なかなかそのお気持ちになっていただけなかったのも、主の近い今、その必要はないというお考えからのようであった。「目を覚まして祈りなさい」とどの手紙にも必ず記してあった。

4、先生は祈りの人であった。日毎に多くの人々のために祈られたばかりでなく、事ある時は、しばしば断食をしてお祈りをなさった。われわれは皆、先生の祈りに捕えられたものである。私はどんなことを疑っても、モーク先生が今日私のために祈ってくださるということだけは疑えなかった。先生はとりなしの祈り、わけても、主の働き人のために祈るべきことを教えられた。

5、先生は思いやりの深い牧者であった。迷える一匹の羊に対しす

る配慮をお持ちであった。1931年のクリスマス、会の後で、先生は私にちょっと残っているように命じられた。何事ならんと思っていると、「おばあさんの代りに、ケーキを作ってあげましたよ」とおっしゃって、ケーキを下さった。すでに両親もいず、その年の8月、ただ一人の肉親祖母に死なれた孤児の私を、哀れと思われたのであろう。

6、先生の愛は、神の愛を思わしめるものであった。人間的なものを越えて、神の愛の無限の深さを見せてくれた。敗戦後満州から引き揚げてきて、はじめて連絡がとれた時、先生は私たちの無事を喜んでくださった。そのお手紙にこう書いてあった。「何でも欲しいものを言いなさい。」わたしはイエス様のみ言葉を思った。

7、先生の心は日本にあった。先生は母国アメリカを愛された。しかしそれにもまして天国を愛された。そのゆえに日本を愛してくださった。東京に洪水があった時、伊勢湾台風の時、いち早く先生は救援の衣類を送って下さった。災害のことをラジオで聞いたと書いてあった。心を痛めながら、古いラジオに耳を傾けておられる先生のお姿を想像すると胸のうちがあつくなった。

8、先生は救いを何よりも大切だと考えておられた。ある人について話をしたとする。学者かもしれない。偉い人かもしれない。だが先生の関心はそこにはない。最後に一言だけお聞きになる「その人はクリスチャンですか。」

9、先生は他人をさばくことをなさらなかった。われわれが人間的な判断を下して、悪口を言った時、静かにおっしゃった。「他人をさばいてはいけません。さばきたもうのは神様です。」

10、先生は今も共にいてくださる。この地上には、先生のお姿はもはやない事を思うと、何ともさびしい。だが先生と私たちを結んでいた祈りの綱が、切れてしまったとは思えない。いや、むしろ先生が地上を去られたのち、ふしぎなことだがいっそう先生の存在を身近に感じている。

(東京都立新宿高校教諭・小石川白山教会教会学校長)

永遠の生命の糧として

篠崎茂穂

(初めて月曜会に参加したとき)呼鈴を押すとモーク先生が出てこられ、握手で迎えてくださって一室に案内された。そこには金ボタンの学生服や和服の青年たちが円形に着席して雑談をしていた。先生は、市内のいろいろな大学高専の学生、14,5名に、新参者の私を温かく紹介してくださった。間もなく出された紅茶の茶器は、田舎での私には初めてみる珍しい形のものであったが、それよりも先生ご自身が一人一人にお茶をくださったことはきわめて印象的で、誠にありがたい気持ちに満たされた。英語の讃美歌を二つ三つ歌い、ついで先生の短い聖句の教え、続いて会員たちの祈り。もちろん私にはできなかったが、同年輩の青年たちの祈りの熱心さには驚かされその反面、心中ではもう止めてほしいとも願っていた。最後にモーク先生が祈られたが、先生は私の名前すら口にし、一人一人のために祈ってくださった。...このように欠席者の一人一人すら覚えて祈られることは、まさに母が不在のわが子を思うての祈りと受け取られた。この先生のお気持ちは、その後私にくださった聖句であるピリピ1・3-6に明確に教示されている。...

日曜の朝のバイブル・クラスは、聖書中心に梗概まで用意しきわめて平易に解説して下さった。それは多くの学者がするように、聖書註解や釈義的立場を紹介したり、それに批評を加えたりするものでなく、聖書がいかに先生の信仰の糧となっているかを証して下さるものであった。そしてそれは、その後聞くようになった内村先生の聖書講義とも似たもので、非常に益するところ大であった。このように、モーク先生から聖書を永遠の生命の糧として与えられ信仰が養われ育てられたために、聖書の記事内容について、先生に対し、また会員相互の間に論争を見るようなことは、ほとんどなかった。月曜会の会員間に信仰の交わりが今日まで続いているのは、このようなところに原因があるのではないかと思わされる。

(日本基督教団早稲田教会牧師)

モーク先生の思い出

柴田徳衛

終戦直後、まだ戦火の跡なまなましかった時、一通の葉書が舞いこんだ。モーク先生から、「お前はどのようにしているのか、目白の家へこないか」という便りである。以後、私が大学を出てアメリカへ渡る頃までいろいろお世話になってしまった。

モーク先生、と言えば、すぐ思い出されるのは、微笑をいっぱいたたえられたやさしい温顔である。しかもそれはいつも驚くほど若やいでいた。だが同時にその底に妥協を許さないきびしいもの、ウソやマヤカシをなんでも見抜く鋭い眼も感じられた。戦争がいよいよ激しくなり、物質もなくなってきたとき、自分はこの日本の地に踏み止まるのだとがんばられたモーク先生、これはだれがなんといってもホンモノである。口ではいえても、まねのできないところだ。

モーク先生が常人のとてもまねられない強さ、厳しさをもちつつ、他方どうしてわれわれにあのようにやさしく、柔和に、いつもスマイルに満ちて接せられたのであろうか。どうして、いつもあのように少女のごとく若くていられたのであろうか。その秘密はただ一つ、たぐいまれな信仰の力にあったというほかあるまい。

別に自己を主張するのではなく、宣伝するのでもなく、いつも控えめにしていて、しかも結果として後世に大きく影響を与えていく人それが、モーク先生であった。こうした先生に接することができ、私も大変幸福だったと思う。身体はアメリカの地になくなられても、その生涯の尊い福音伝道の成果は、ますます私たちのあいだにひろがっていくことがひしひしと感じられる。

(東京都立大学助教

授)

ミス・モークの思い出

鈴木 宏

ミス・モークは自分を偶像化されることを一番恐れた。イエスにでなく、人間ミス・モークの人格に引かれて自分の周囲に人が集まることを恐れた。ある時ミス・モークはこんな話をされた。「ある信者が一人の牧師に傾倒して、その牧師が転勤するたびに自分も従って7度も教会をかえた。この人はイエスに従ったのではなく、人間牧師に従ったにすぎなかった。皆さんはイエスに従うものであってほしい」と。

ミス・モークなくしては私は救いにあずからなかっただろう。私は国鉄ビル聖書研究会を通じて救われた。国鉄ビル聖研は終戦直後の昭和20年に発足し、藤田昌直牧師とミス・モークが来られて、毎週水曜日の昼休みに集会が持たれていた。(ミス・モークの帰米後も続いて今日までささやかながら集会を続けている。)私は昭和24年の初め頃当時の英語ブームに押されて英会話の助けにでもなればと考えて、この聖研に出席し始めた。そしてミス・モークの人格、あの柔和な笑顔に引きつけられて毎回出席するようになった。何回目かの集会で、「この集会に讃美歌を覚えようと出席している人もあろう、また英語を学ぼうと来ている人もあろう。それも悪くないが、しかし必ずやそんなことと比較にならない大きな恵みを、主はこの集いを通じて与えられるでしょう」とミス・モークが話されたことが忘れられない。このミス・モークの予言(あるいは祈りとも言えようか)のとおり、あれだけの合理主義者で、神なんてと思っていた私が、わずか8,9ヶ月後に信仰を告白して受洗したのであった。

ミス・モークは自己を偶像化されるのを恐れ、イエス・キリストを前面に押し出そうと努められた。その謙虚さのゆえにミス・モークは更に美しく見えることになった。しかしそれだからこそ私たちはミス・モークの人格に傾倒しただけでなく、彼女をかくあらしめたもう背後にあるお方について考えざるをえなくなり、イエス・キ

リストを信ずる信仰に入れられたのである。（国鉄機関車課長）

モーク先生

内藤誉三郎

私は昭和 5 年に東京高師の英語科に入学した。当時毎週木曜日の午後 6 時頃からモーク先生のバイブル・クラスが寄宿舍で開催されており、友人たちも英語の勉強に出席しているので遊び半分に出席したのが先生との交わりの初めである。毎週月曜日には午後 3 時頃から 6 時頃までいつ来ていつ帰ってもよい自由な集会在先生のお宅で開かれ、お茶とお菓子がサービスされ、英語で聖書を読んだり、讃美歌を歌ったり、雑談したりお祈りしたり、楽しい時を過ごしたものである。

このマンディ・ミーティングには先輩も後輩もできるだけ多くの方々が出席してお互いに励まし合い、またモーク先生との個人的接触がもたれ心の救いでもあった。私は月曜会は非常に成功であったと思う。この会から有為の人材が輩出した。個人的な交わりがいかにか大切にされるかをしみじみと感じた。親元を離れて無味乾燥な淋しい学生生活を送っているものには真に心のオアシスであった。少なくとも月曜日、木曜日、日曜朝のバイブル・クラスと週 3 日はモーク先生に直接接する機会があったので、変動しやすい学生生活の中で、ほんとうに心の支えとなり大した脱線もせず無事に卒業できたわけである。モーク先生がスピリチュアル・マザーと呼ばれるゆえんである。...

米国で引退した宣教師の集会で、各自、生涯のハイライトを語ったときに、各国の大統領や皇帝や王様に面会したことや感謝状をいただいたことなど自慢話が語られたそうだが、わがモーク先生は静かに立って、このことにはふれずに「イエス・キリストのまぼろしを見たこと」を最高の栄誉として語ったそうである。明日は焼かれ、盗まれ炉に投げ入れられるかもしれぬ地上の栄華、栄誉を語らず、永遠の生命の中に生きる喜びを語ったのは、さすがにわれらの師であると思った。

(文部事務次官)

モーク先生、思い出すまま

中島清子

(初めてお会いしたときの)先生のその時のお説教はマタイ伝5章14節16節。「灯をますの下に置くな、高くかけよ、あなたがたは家庭の灯です、どうぞ灯を高くかけて下さい」。心にしみとおるような力強いお説教でした。先生の慈愛に満ちた顔を仰ぎ、先生のお言葉の一句一句が身にしみて、せきをきったように涙があふれ出るのを止めることはできませんでした。一家の主婦が暗い気持ちでいることが、そんなに悪いことと改めて思ったことがない私、先生のお言葉とは全くうらはらに灯どころか全く暗やみの私であったと、罪意識の突然の自覚。その大きなショックでございましたのでしょう。きたない憂いに沈んだ心を熱いとめどもない涙で洗い流してくださったモーク先生の説教こそ、私の人生を180度転回させたキリスト教信仰の第一歩であったと思いますと、モーク先生も、マタイ伝5章も、共に終生忘れることのできないものとなりました。...

けれども今、先生は天国にいらっしゃる、いつでもお祈りする時、神の軍勢の中にモーク先生がいらっしゃるということは、もう距離などなくなし、私の祈る心の中にモーク先生がいられるのは、どんなにうれしいこととございましょう。

私が3年ほど前、交通事故で、3時間に余る手術の時、こらえどころのないほどの痛さも、詩篇23篇の聖句で救われました。その時は汝の信仰汝を救えり、我世に勝てりと大声をあげて叫び続けたいような歡喜、死の陰の谷を歩む時、主は贖ってくださった。その主イエスにお導きくださったモーク先生！心は暗黒のちまたをさまよっていた時、悔い改めの涙を流させてくださったモーク先生！私の信仰を語るとき、モーク先生なしに語ることはできません。

(主婦)

あかしのためにきたひと

長谷川進一

ミス・モークはバイブル・クラスで四福音書を説いた。私の記憶では、使徒行伝と黙示録の一部を講義されたことがあったと思うが、結局は四福音書にもどり、うまずたゆまず、繰り返して講義された。彼女は文字通りに神の言葉を信じ、福音書にあることは奇跡でも何でもすべてほんとのこととして説いた。彼女は自分の母国アメリカについて多く語らなかった。

神学を説かなかった。宗教と科学の衝突について理論的解明を与えなかった。経済問題についてはまるで興味がないようであった。ただ世界情勢については時のしるしとしてたまに触れることがあった。

彼女はごく単純に神の言葉を説いた。...

モーク先生については誰もが、先生は忍耐強い人だ、心のやさしい人だ、清い人だ、愛の人だという。そして生涯少しもそれが変わらなかった。これは先生の生まれながらの性質であろうが、しかし、私は先生が毎日聖書を読み祈りしている間に、体中が信仰でかたまって、バイブルの行者のようになった結果であろうと思う。精神修養というような生やさしいものではない。彼女はほんとうの意味のバイブルウーマンであった。己を捨てて神の婢女となった人であった。彼女の日本人に対する愛情もこの泉からおのずから噴き出したものであったろう。

「ここにひとりの人があつて神からつかわされていた。その名をヨハネといった。この人はあかしのためにきた。光についてあかしをし、彼によってすべての人が信じるためである。彼は光ではなく、ただ光についてあかしをするためにきたのである。」(ヨハネによる福音書第1章6-8)

このヨハネの名をモークと言いかえてみて少しもおかしくない。これが伝道者として彼女の真価であった。彼女は一生をそのために捧げ、限りない光につつまれて天に召された。

(ジャパンタイムズ取締役)

モーク先生

広野 薫

(第 2 次大戦中) 抑留所には一度だけご面会に参りました。田園調布でおりて、どこをどう歩いたか、今全然思い出すことが出来ませんが、広野 (捨二郎) と、メーヤ先生のお宅のおばさんと 3 人でした。立会いの人がおりましたし、みんなだまって、私はただ先生のお手をにぎって顔をじっと見ただけで帰ってきました。あの中での先生のご生活、おそろしい空襲の音をききつつ、まず自分の上にと祈られたともうかがいしましたが、そして、ついには愛する人たちの死のしらせをも受けられなければならなかったお心のうちを思うと、たまらない気がいたします。終戦の年の 12 月、子供たちのたつての願いで疎開先から上京、高円寺の石館先生のお宅で、再び先生にお会いすることが出来ました。ただ涙でした。

それからの先生には、戦前と違ったいろいろなお仕事が山のようにはありました。先生は、大学生やそのほか、だいたい英語でのご生活が主でしたから、日本語はとうとうあまりお上手になられませんでした。戦後はバイブル・クラスのほかに、その日本語で教会の婦人会、それも終戦直後は、いろいろな意味で、どこの婦人会もずいぶん出席率がよかったものです。その婦人会でのお話。いろいろな問題のご相談、それから一般の人たちや役所関係の交渉など、どんなにか心身を労せられたことをございましょう。

広野が生前よく「モーク先生に祈っていただいて来る」と申したものでございますが、広野亡き後、こんどは私が何かと先生の所にご相談にうかがいました。ほんとにあの困難な時代に、先生のお祈りのおはげましと、愛のお支えがなかったならば、私どもはどうても生きぬくことが出来なかったと思うのでございます。それだけに、先生の晩年のご様子をうかがうにつけ、また思いのほか早くご召天なされたことを思い合わせて、今さらのように先生のご労苦が身にせめられる思いがいたします。...

(故広野捨二郎牧師夫人)

